雁塔聖教序から生まれた同州聖教序

荒　金　大　琳

【キーワード】
雁塔聖教序・同州聖教序・褚遂良・修正線

【要　　旨】
雁塔聖教序に見られる修正線が同州聖教序にも多数見られることにより、同州聖教序は雁塔聖教序の拓本を利用して作成したことがわかった。しかし、100％そのままの複製ではなく、拓本を利用して、前後の文字と入れ替えなどの工夫を加えながらの作成である。

はじめに

雁塔聖教序[1]の原石の見学と接写を通して、雁塔聖教序に存在する修正線を発見した。小論はこの雁塔聖教序の修正線を念頭に置き、同州聖教序との関係について考察を行う。

2007年の中国での発表[2]では褚遂良が同州に左遷された理由について記した。同州聖教序が建立されたのは龍朔三（663）年。褚遂良が同州刺史を務めて12年後のことであり、愛州（現在はベトナム領）で他界して７年後の年にあたる。故に、褚遂良がこの「龍朔」という年号を知る由もない。古今、同州聖教序についての文献を多く見ることは出来るが、建立者の推定にまでは至っていない。小論においては雁塔聖教序と同州聖教序の関係を通じて、両碑に共通する修正線の確認の結果を踏まえ、同州聖教序の建立の経緯とその背景を探るとともに同州聖教序の建立者の推定に至りたい。

一、これまでの見解

同州聖教序は宋の時代より金石学の著書に紹介されており、現在西安碑林にある同州聖教序碑の碑陰にも宋人の題記を見ることが出来る。路遠氏が整理している通り、宋の時代において、金石学者も一般の官宦や文人たちも同州聖教序が褚遂良の作品であると認識している[3]。さらに、欧陽棐[4]・趙明誠[5]・鄭樵[6]らが示している「摸本」・「重立」などのことばからは、同州聖教序が

[1] 雁塔聖教序は太宗の撰した聖教序と高宗が皇太子の時に撰した聖教序記を褚遂良が揮毫したもので、西安慈恩寺にある大雁塔の南門入口の左右の龕に埋め込まれている。多くの著書が誤った位置関係を記載しており、混乱を招いているが、正しい位置関係は左（西）が序、右（東）が序記である。
[2] 荒金大琳「雁塔聖教序におけるいくつかの問題」、『第六回中国書法史論国際研討会論文集』文物出版社、2007年。
[3] 路遠「褚遂良書『同州聖教序碑』可靠性之弁析」『書法叢刊』2008年第３期。
[4] 欧陽棐『集古目録』巻五「三蔵聖教序記（永徽四年）」条・「三蔵聖教序記（龍朔三年）」条、『石刻資料新編』第一輯第24冊、17968・17969頁。
[5] 趙明誠『金石録』巻四「三蔵聖教序並記」条、『金石録校証』広西師範大学出版社、2005年、59頁。
[6] 鄭樵『通志二十略・金石略』、中華書局、1995年、1878頁。

雁塔聖教序から作成されたことに触れている。近代の学者梁啓超[7]は「同州聖教序は褚遂良の作品ではない」としているが、あくまでも少数意見である。

雁塔聖教序と同州聖教序の両碑の書風の相違については多くの先人が記述している。趙涵は『石墨鐫華』で「同州聖教序のほうが雁塔聖教序より勝っている[8]」とし、郭宗昌は『金石史』に於いて、雁塔聖教序を刻した者は褚遂良の書体を学習しており、同州聖教序を刻した者は欧陽詢の書を学んでいた[9]と「摸手」の違いをあげている。一方の梁章鉅は『退庵題跋』にて「重摸」ではなく「臨摸」である[10]といい、郭宗昌・梁章鉅の二人は異なる見解を示している。王世貞と畢沅は使用した教材が異なっているとも記している。

沈道栄氏は『褚体弁異字典』を編纂し、その中で「同州聖教序が雁塔聖教序の摸刻である[11]」と断言している。

以上のように、同州聖教序は褚遂良の手によるものと認められながらも、雁塔聖教序と異なる作品として捉えられている。

二、同州聖教序の揮毫について

路氏は更に、褚遂良が同州刺史を務めている期間に揮毫することは不可能であるとしている。理由として、太宗・高宗の二文が雁塔聖教序の石碑として初めて公開されたことをあげている。三蔵法師が印度から帰国し、三蔵法師の翻訳した経典の序文として太宗が書いたのが「序」であり、序の発表を受けて当時皇太子の李治が書いたが「序記」である。揮毫日時については諸説があるものの集字聖教序には「貞観二十二（648）年八月三日内出」との記載がある。『大慈恩寺三蔵法師伝』では太宗が自ら揮毫し、三蔵法師と百官の前で、弘文館学士の上官儀に朗読させたことが記されている[12]。路氏の論に従うと、雁塔聖教序にて石碑という形で聖教序の文章が、初めて世に送り出されたことになる。しかし、その時点では、既に太宗は揮毫しており、上官儀によって朗読もされている。よって、同州刺史を務めている期間に褚遂良が揮毫することもあり得る。褚遂良の同州左遷は雁塔聖教序完成以前のことだけに、史実上の考察のみで解決すれば、褚遂良が同州にて揮毫したことを否定することはできない。しかし、褚遂良が同州刺史の期間に揮

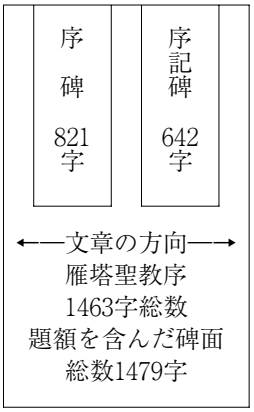
[7] 梁啓超『碑拓跋』「明拓同州本聖教序」条、『石刻資料新編』第三輯第38冊、208頁。
[8] 趙涵『石墨鐫華』巻二「唐三蔵聖教序並記」条、『知不足斎叢書』第三集、中華書局、1999年、第一冊、820頁。
[9] 郭宗昌『金石史』巻下「唐褚書同州倅廳聖教序記」条、『知不足斎叢書』第四集、中華書局、1999年、第二冊、254頁。
[10] 梁章鉅『退庵題跋』巻上「同州聖教序跋」条、『石刻資料新編』第二輯第20冊、14440頁。
[11] 沈道栄『褚体弁異字典』、「後記」、204頁、陝西人民美術出版社、2004年。
[12] 慧立・彦悰『大慈恩寺三蔵法師伝』、中華書局、1983年、142頁。

「雁塔聖教序」の行数の整理

<table>
<tr><td>21</td><td>20</td><td>19・18・17・16・15・14・13・12・11・10・9・8・7・6・5・4・3・2・1</td><td>1</td><td>題額</td><td>行</td></tr>
<tr><td rowspan="2">27字</td><td>25字</td><td>1行42字　2行から19行目まで18行×42字＝756字</td><td rowspan="2">13字</td><td rowspan="3">8字</td><td rowspan="4">序碑</td></tr>
<tr><td colspan="3">太宗皇帝が撰（作文）した序文756字＋25字＝781字</td></tr>
<tr><td colspan="5">序碑の文字合計821字</td></tr>
<tr><td colspan="6">題額８字を加えた数　829字</td></tr>
</table>

毫したか否かは褚遂良の精神状態と深くかかわっており、その期間の揮毫はあり得ないと考えている。しかし、この真偽については褚遂良の心情の問題なので文献や考古資料から確証を得ることはできない。小論は「同州聖教序は雁塔聖教序の拓本をもとにして作成したもの」という考えのもとに、以下論証を進める。

三、雁塔聖教序との関係



同州聖教序が雁塔聖教序の拓本を基に作成されたか否かの検証を行う。

１、文章の構成について

まず、文章の構図配置が双方で異なることを確認する。

雁塔聖教序（1463字）は序碑（821字）と序記碑（642字）の二つの碑の集合名詞に対して、同州聖教序（1393字）は序（794字）と序記（599字）の両文が一つの碑に刻された一碑単体の名詞である。

雁塔聖教序の序碑は左側にあり、文章の方向は右から左へと進み、文字数は１行目の13字「大唐太宗文皇帝製三蔵聖教序」、２行目から20行目の太宗皇帝が書き記した序文781文字と、文末21行目の27字「永徽四年歳次癸丑十月己卯朔十五日癸巳建。中書令臣褚遂良書」の821字である。この他に題額８字「大唐三蔵聖教之序」が隷書で書かれている。序碑に記載されている総文字数は829字となる。

雁塔聖教序の序記碑は右側にある。文章の方向は左から右に進み、文字数は１行目の11字「大唐皇帝述三蔵聖教序記」、２行目から18行目の当時皇太子であった李治が書き記した序記文578字と、19行目から20行目の文末の53字「記（１字）・永徽四年歳次癸丑十二月戊寅朔十日丁亥建（年月日19字）・皇帝在春宮日製此文（高宗が皇太子の時に撰したことを示した説明書き９字）・尚書右僕射上柱国河南郡開国公臣褚遂良書。萬文韶刻字（署名24字）」の642字である。他に題額８字「大唐三蔵聖教序記」が篆書で書かれている。序記碑に記載されている総文字数650字となる。　雁塔聖教序は序碑と序記碑、両碑の集合名詞であるから1463（821＋642）字が総数となる。さらに、雁塔聖教序の両碑にはそれぞれに題額が付いており、この題額まで加えると、両碑面における文字数は1479（1463＋16）字となる。全てが左右対称に配置され、文章も中央から端の方に向かって両碑は揮毫されている。

同州聖教序は両文一碑であり、全ての文章は右から左へと進んでいる。①

行	題額	1	2・3・4・5・6	7	8	9・10・11・12	13	14	15	16	17	18	19	20
序記碑	8字	11字	1行40字 5行×40字 ＝200字	4字	30字	1行40字 4行×40字 ＝160字	39字	29字	40字	25字	11字	40字	20字	33字
			当時皇太子であった李治が撰（作文）した序記文578字											
		序記碑の文字合計642字												
	題額８字を加えた数　650字													

（雁塔聖教序本文の総字数1463字）、（両碑の題額を加えた総数1479字）

は１行目の13字「大唐太宗文皇帝製三蔵聖教序」から始まり、太宗皇帝が書き記した序文794字（２行目から15行目）であり、②は16行目の11字「大唐皇帝述三蔵聖教序記」から始まり、皇太子李治が書き記した序記文599字（17行目から27行目）と続き、③の末尾「龍朔三年歳次癸亥六月癸未朔廿三日乙巳建（年月日19字)。大唐褚遂良書在同州倅廳（署名11字)」の計30字へ移行している。同州聖教序は行数29で字数は1423字であり、一碑一つの題額(８字)を加えると総計1431字になる。

「同州聖教序」の行数の整理

<table>
<tr><td>行の数</td><td>1</td><td colspan="7">2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14</td><td>15</td><td>①序文
781字＋13字</td></tr>
<tr><td>タイトル</td><td>13字</td><td colspan="7">１行58字　13行×58字＝754字</td><td>27字</td><td></td></tr>
<tr><td>①序文</td><td>781字</td><td colspan="8">（754字＋27字）</td><td>794字</td></tr>
<tr><td>行の数</td><td>16</td><td colspan="2">17・18・19</td><td>20</td><td colspan="2">21・22・23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>②序記文
588字＋11字</td></tr>
<tr><td>タイトル</td><td>11字</td><td colspan="9">588字（174字＋57字＋174字＋57字＋58字＋56字＋12字）</td></tr>
<tr><td>②序記文</td><td></td><td colspan="2">１行58字
３行×58字＝174字</td><td>57字</td><td colspan="2">１行58字
３行×58字＝174字</td><td>57字</td><td>58字</td><td>56字</td><td>12字</td><td>599字</td></tr>
<tr><td>行の数</td><td>28</td><td>29</td><td colspan="7">後人の手によるとするもので別項目にする</td><td>③</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③30字</td><td>19字</td><td>11字</td><td colspan="7" rowspan="2"></td><td>30字</td></tr>
<tr><td colspan="2">30字</td><td></td></tr>
<tr><td>題額</td><td>題額</td><td>８文字</td><td colspan="7">後人の手によるものと推測するので別項目にする</td><td>８字</td></tr>
<tr><td>同州聖教序</td><td colspan="9">①序794字＋②序記599字＋③30字＝1423字＋８字＝1431字</td><td>計1431字</td></tr>
</table>

雁塔聖教序と同州聖教序との文字数の比較

	序		序記				計	
	本文	年月日署名	本文	年月日	説明文	署名	編みかけ部分の合計	総合計
雁塔聖教序	794	27	599	19	9	24	1393	1463
同州聖教序	794	0	599	19	9	11	1393	1423

雁塔聖教序と同州聖教序との比較において、序と序記の本文と、序記の27行目にある高宗が皇太子の時に書いた「皇帝在春宮日製此文（９字)」の部分が一致する事が確認できた。それが1393字の 表の編みかけ部分 である。しかし、雁塔聖教序と同州聖教序では行数・改行の状況などは変化しているため同州聖教序を作成する際に、雁塔聖教序二基（序・序記）の全拓を直接使用していない事は一目了然である。

２、文字の大きさについて

次に、文字を一行一行、一字一字切り離して制作している可能性を探る。同州聖教序において雁塔聖教序の文字が直接利用されている事が確認出来れば、雁塔聖教序を基に同州聖教序が作成された事が証明できる。清の梁章鉅は「皆雁塔本大而同州本小（雁塔聖教序が大きく、同州聖教序が小さい)」[13]と記し、郭宗昌は「与慈恩大小略同（同州聖教序と雁塔聖教序の字の大きさはほぼ同じ)」[14]と記している。このように先人はこの二作品の文字の大きさが若干異なっていることを指摘している。しかし、雁塔聖教序の拓本を用いて同州聖教序を作成すれば、ほぼ同じ大きさになるはずである。このことを立証するために文字の測定が必要になる。印刷物での比較においては拡大縮小の問題が発生する為、所蔵の原拓を用いた。文字の上下左右の四点から底辺が水平になるよう長方形を作り、縦と横の長さを測った。

その差をまとめたのが次の表である。

同州聖教序を基盤に測定した両碑の誤差	序の部分		序記の部分		合計	
	横	縦	横	縦	横	縦
−1.0	0	0	0	0	0	0
−0.9	0	0	0	0	0	0
−0.8	0	0	0	1	0	1
−0.7	0	0	0	0	0	0
−0.6	0	0	1	0	1	0
−0.5	2	3	3	2	5	5
−0.4	1	1	12	4	13	5
−0.3	7	4	21	15	28	19
−0.2	19	11	64	45	83	56
−0.1	81	69	118	110	199	179
0	170	152	133	174	303	326
+0.1	186	240	123	123	309	363
+0.2	151	173	72	68	223	241
+0.3	100	75	29	28	129	103
+0.4	39	38	10	14	49	52
+0.5	17	8	6	11	23	19
+0.6	6	6	3	1	9	7
+0.7	4	4	1	0	5	4
+0.8	2	1	0	0	2	1
+0.9	0	1	0	0	0	1
+1.0	1	0	0	0	1	0
計	786	786	596	596	1382	1382
合計	794(測定不能8)		599(測定不能3)		1393(測定不能11)	

表の中で、０は同州聖教序と雁塔聖教序で同一文字の縦または横の長さが同じであることを意味し、＋0.1は同州聖教序の方が0.1cm 長く、－0.1は同州聖教序の方が小さいことを意味する。表から見て一番数値が大きいのは０と＋0.1であり、０と＋0.1を合わせる約半数（横612字・44.3%。縦689字・49.9%）を占めている。次に、視野を－0.3から＋0.3の範囲に広げてみると、横は1274字で92.2%、縦は1087字で78.7%となり、同州聖教序と雁塔聖教序の文字の大きさがほぼ一致することが分かった。

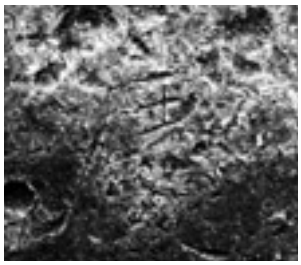
一方で横幅に１cmも差が出てしまった字が15行目２字目の「慶」である。それはどのような理由によるものであろうか。

同州聖教序の「慶」（769）と雁塔聖教序の同位置の「慶」（769）とは形を一にしていない事が一目でわかる。実は同州聖教序の769の「慶」は雁塔聖教序の序記157の「慶」と同形である。同

[13] 梁章鉅『退庵題跋』巻上「同州聖教序跋」条、『石刻資料新編』第二輯第20冊、14440頁。

[14] 郭宗昌『金石史』巻下「唐褚書同州倅廳聖教序記」条、『知不足斎叢書』第四集、中華書局、1999年、第二冊254頁。

15行目２字目の「慶」

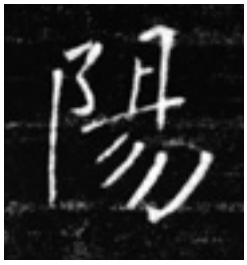
		
雁塔聖教序769	同州聖教序769（15行目２）	雁塔聖教序記157

じ雁塔聖教序でも別の場所の「慶」の文字を使用している。故に大きさが異なっている。雁塔聖教序の「慶」の碑面には傷が多く、文字も見える状態ではない。この状態が雁塔聖教序建立当時からだったのか否かの問題へと広がっていく。もし仮に、雁塔聖教序建立当時は文字がはっきり見えていたならば、同州聖教序に用いていたはずである。このことは建立当時にもう見えない状態にあったと理解してもよいだろう。ここではこの様に明らかに他の場所や作品から移転されている文字や一方が見えにくく比較出来ないものを除き、雁塔聖教序の文字から作成されたと思われる同州聖教序の文字のみで測定した表を再度作成した。すると、次のようになる。

	序の部分		序記の部分		合計	
同州聖教序を基盤に測定した両碑の誤差	横	縦	横	縦	横	縦
−1.0	0	0	0	0	0	0
−0.9	0	0	0	0	0	0
−0.8	0	0	0	1	0	1
−0.7	0	0	0	0	0	0
−0.6	0	0	1	0	1	0
−0.5	2	3	2	2	4	5
−0.4	1	1	8	3	9	4
−0.3	7	3	14	12	21	15
−0.2	18	10	55	34	73	44
−0.1	80	69	97	92	177	161
0	165	149	114	153	279	302
+0.1	178	230	105	104	283	334
+0.2	144	168	61	55	205	223
+0.3	93	66	8	20	114	86
+0.4	37	34	5	11	45	45
+0.5	16	8	1	6	21	14
+0.6	4	6	1	0	5	6
+0.7	4	3	0	0	5	3
+0.8	1	0	0	0	1	0
+0.9	0	0	0	0	0	0
+1.0	0	0	0	0	0	0
計	750	750	493	493	1243	1243

	序の部分	序記の部分	合計
合計	794 不採用44 （不共通36･測定不能8）	599 不採用106 （不共通103･測定不能3）	1393 不採用150 （不共通139･測定不能11）

二つの表を比べると、表の上下にある差の大きいものが取り除かれている。制作過程において全体的に雁塔聖教序を基にしているが、部分的には使用しにくい文字は用いていないことになる。大きさがほぼ同じ文字については引き続き文字の比較研究が必要となる。この中にはそっくりに再現できているものもあれば、一部を模倣し、部分的に模倣できなかったものもある。文字の大きさが縦も横も一致する例としては二行目38文字目の「陽」がある。文字の外側の輪郭を取ってみるとほぼ一致する。しかし、内部に入筆部分や縦線のそりなどに違いは発見できる。線の長さと角度は一致し、文字の中の空白の変化は線の太さの変化と直接関係している。同州聖教序の線が太く、文字の大きさが同じということは必然と文字の中の空間が狭くなっていることになる。数値的には比較的大きな差が出てしまったものにも、部分の酷似は見て取れる。特に修正線の模倣はこの二つの文字が直接関係していることを物語ることになる。完全に模倣できなかった時には数値に違いが生じてしまっている。同州聖教序が若干大きいのは雁塔聖教序より線が太いことも原因の一つと言えるだろう。


雁塔聖教序

同州聖教序

次に文字の形が横長か、縦長かについての調査結果を掲載する。上の表で測定した数値を用いて横長・縦長・正方形の三つに分類した。同じように両聖教序の文字が関連しているものに絞っての数値とする。

	序の部分			序記の部分			序・序記両部分の計			計
	横長	縦長	正方形	横長	縦長	正方形	横長	縦長	正方形	
雁塔聖教序	397	285	68	290	169	34	687	454	102	1243
同州聖教序	406	279	65	284	178	31	690	457	96	1243

雁塔聖教序・同州聖教序の両碑共通に省いた文字（150）、合計字数（1393）

両碑の数字を比較すると、わずかな誤差があるのみで、縦横の比率に関しても双方の共通点を見ることができる。

以上の分析により、平均的に同州聖教序のほうが若干大きく見える。しかし、この数値から判断すれば「ほぼ同じ大きさ」と考えてよいだろう。縦と横のバランスを見てもほとんど変化のないことが分かる。

３、文字の比較

共通の文字といっても、まったく一致しているとは言えない。雁塔聖教序の拓本を用いて作成する視点から観察し、明らかに雁塔聖教序の文字を用いたと判断できるものを共通の文字とする。1999年に筑波大学において開催された書学書道史学会にて雁塔聖教序の修正線の発見を公開

し、現在に至るまでその研究を続けているが、その修正線とまったく同じ表現が同州聖教序から発見できれば、その文字は雁塔聖教序の文字を用いて作成したことになる。同一文字を書くときに毎回同じように同じ場所に修正を加えることはありえないからである。比較観察の結果、修正部分を忠実に表現しようとしている箇所が多くあるが、線は全体的に太く、修正の意図を十分に汲み取れずに不自然な表現になってしまった箇所もある事が解かった。

同州聖教序を作成した際に雁塔聖教序を使用したとしても、それは原石ではなく拓本であったに違いない。当時の拓本と言えば唐拓になる。現存する宋拓より更に何百年も古く、建立年代から月日が経過しない時期の拓である。故に、敦煌から発見された唐の太宗の温泉銘のように精密なものであったと予想できる。原石と宋拓を比較すると拓本では見ることのできない修正線が多数存在していることが判明している。当時使用した拓本は宋拓よりも繊細であり、少なからず原石の修正線を映しだせない部分があったとしても比較的原石に近いものと考える。現存する雁塔聖教序の資料では拓本よりも原石の写真の方が顕かに精密なので原石を用いながら比較することは最善の方法と言えるだろう。雁塔聖教序と同州聖教序の同部分を比較して、二つの文字に関連を見出せるものを探してみた。

次がその結果である。

	序の部分	序記の部分	合　　計
関連ある表現	751	499	1250
関連なし	14	52	66
はっきり見えない部分	29	48	77
合計	794	599	1393

A 関連ある表現

上記の表のように、関連あると判断される文字は1250字あり、全体の94.98％にあたる。この数字こそが、「同州聖教序が雁塔聖教序の拓本から再現された」と考える所以である。1250字の中を次のように分類する。(a)　造形・修正部分が一致しているもの。(b)　修正部分の再現はよく出来ているが、その部分に神経が集中してしまい、文字全体もしくはその他の部分の造形が崩れたもの。(c)　修正部分再現の意図は十分見て取れるが、修正の理解が伴わず、別の筆意になり、異なる造形になったもの。

以下例を挙げて説明する。

(a)　造形・修正部分が一致しているもの。(序に36字、序記に11字)

修正部分を理解し、良く再現されたもの。

雁塔聖教序	同州聖教序	説明
序碑11[15]	序11（１行目11）	一画目と最終画の入筆の修正線は同州聖教序において自然な線の入筆へと修正され実線に変化している。二画目の入筆と八画目の横線は修正線の跡が良く再現され残っている。

雁塔聖教序	同州聖教序	説明
序碑14	序14（２行目１）	七・八画目の入筆と十一画目の最終線の入筆も修正部分を理解し、修正線の跡が良く再現され残っている。
序碑23	序23（２行目10）	二画目の下部にある修正線と、四画目の入筆部分は修正部分を理解し、修正線の跡が良く再現され残っている。
序碑29	序29（２行目16）	二本になっている三画目の左払いの修正部分は拓本でも観察できる。六・七画目の点の起筆の不自然さも同様に、刻者の迷いは感じるものの、修正部分をよく理解し、修正線の跡が再現されている。
序碑39	序39（２行目26）	最終画の波磔の上にある線にどんな意図があるのかは別として、修正線の部分を良く再現され同じ造形であることを立証している。
序碑75	序75（３行目４）	二画目の縦線の終筆部分と、最終画の点の表現は行意を楷意に訂正しようとしたものであり、行意の跡も修正線をよく理解され表現している。
序碑76	序76（３行目５）	四画目の入筆は修正を意図する線である。修正から生まれたこの表現を用筆法とは関係なく、修正部分を適格に表現しようとして再現されている。
序碑794	序794（15行目27）	二画目の左払いは充分に表現されたものではないが、修正部分の意図を理解し、修正線の跡が良く再現され残っている。

[15] 「序碑11」とは雁塔聖教序の序碑の11番目の文字を表す。同州聖教序のほうは序の11番目という数字の後に括弧書きで石碑の何行目の何番目という表記を加える。序記の場合、石碑の16行目からはじまるので、たとえば一番目の「大」の表記は「記１（16行目１）」となる。

 序記碑18	 記18（17行目７）	二画目の入筆は修正したことが理解できる。いずれの長さが褚遂良の真意かは不明であるが、修正線の跡が良く再現され残っている。
 序記碑357	 記357（22行目57）	雁塔聖教序の中に数多くある行意の表情が良く表現されている一例でもある。
 序記碑459	 記459（24行目43）	一画目の二重線と六画目の点にある修正線の意図を十分に理解し、修正線の跡が良く再現され残っている。
 序記碑612	 記593（27行目６）	一画目から二画目に至る俯仰線は、同州聖教序において完璧に表現されていないが、修正部分を理解して、修正線の跡が良く表現しようとする気持ちは観察できる。

(b)　修正部分の再現はよく出来ているが、その部分に神経が集中してしまい、文字全体もしくはその他の部分の造形が崩れたもの。

雁塔聖教序	同州聖教序	説明
 序碑142	 序142（４行目13）	一画目の起筆は修正線から生まれたものであり、修正部分を理解し、修正線の跡が良く再現されている。
 序碑496	 序496（10行目19）	三画目の点は下の方に伸びている。これも実線を表現しようとしたものではなく、修正線を理解し、修正線の跡を再現しようとして生まれた線である。
 序碑543	 序543（11行目８）	二画目の縦線の終筆部分は行意を楷意に改めようとしたものであり、修正部分の意図を理解し、修正線を再現しようとしている。

いずれも修正部分は再現されている。修正線が確認できるということは雁塔聖教序を基盤に作成したと言えるだろう。

(c) 修正部分再現の意図は十分見て取れるが、修正の理解が伴わず、別の筆意になり、異なる造形になったもの。

雁塔聖教序709	序709（13行目58）	同州聖教序の波磔部分の不自然さと、雁塔聖教序の短い線を長くした修正線の波磔の不自然さを比較。修正の意図が全く理解出来なかったのか、別の筆意と造形になっている。四画目の縦線も急に太くなり、不自然さが目立つ。

修正線の再現はないが造形は同一である。雁塔聖教序の修正線は原石を拡大すると理解できるが、拓本に写らないものが多数ある。

B 関連のない表現

同位置、同文章の文字との比較を実施すると、一致しないものがある。沈道栄は『褚体弁異字典』にて「同州聖教序には雁塔聖教序と字形・筆意が異なるものとして19例ある」と指摘している[16]。その中には筆意の異なるものとして、同形のものも含まれている。

関連のない表現として、次の三つに分類した。

(a) 他の作品より使用したもの。

「茂」の文字、草冠の表現は雁塔聖教序とは異なり、「蘭亭序」の「茂」と同一の表現の文字を使用している。下に４種の蘭亭序の「茂」を挙げたが、この文字が蘭亭序から来ていることは一目瞭然のことである。

雁塔聖教序	同州聖教序	蘭亭序		
序記碑73	記73（18行目４）	張金界奴本	馮承素本	定武本

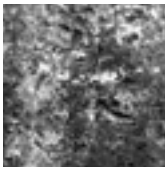
その他、房玄齢碑（褚遂良）の文字と酷似しているものが現在５文字見つかっている。房玄齢碑との関係は別稿にて発表する。

(b) 雁塔聖教序の同文同箇所の文字とは異なるが、雁塔聖教序の中の別の同文字に同じ表現があるもの。

雁塔聖教序	同州聖教序	他位置の雁塔聖教序	同州聖教序
序碑136	序136（４行目７）	序碑207	130（４行目１）

[16] 沈道栄『褚体弁異字典』、“付録”（197～198頁）にその十九字「聖・象・宙・区・常・遷・八・群・隻・正・析・孤・人・茂・秘・竊・伽（迦）・印・光」が紹介されている。

上の部分のみ序碑207より使用しているこの文字は４行目７文字目であるが、同じ４行目の一番目の文字が同じ「無」の文字である。130「無」との類似を避けるために、上部のみ序記207から移行したのではないかと考えられる。

雁塔聖教序	同州聖教序	他の位置の雁塔聖教序の文字
序碑600	序600（12行目７）	序碑50（洞）
雁塔聖教序の中に「序碑600」以外の「濤」が無かった為、そのものの文字を見つけることができなかった。しかし、偏においては同じ表現のものを見つけることができた。二つ目の点から三つ目の点に移行する線と３つ目の点の位置関係は同じである。通常は２画目から３画目の起筆の部分につながり、３画目の点のやや中央よりの方向にぶつかろうとしている。雁塔聖教序における修正線の代表的な表現の観察である。		
序碑642	序642（12行目49）	序記碑224
１画目の横線と真ん中の縦線の関係は一致しないが、よく似ている字である。どの程度似ていたら、その文字から用いたと言えるのかは判断すること自体難しい。		
序碑643	序643（12行目50）	序記碑481
序碑726	序726（14行目17）	序碑370
 序碑727	序727（14行目18）	序記碑636

序碑768	序768（15行目１）	序記碑521
序記碑85	序記85（18行目16）	序記339
文章の同位置の「義」とは一致しないが、雁塔聖教序の別の箇所の「義」と一致する。		

雁塔聖教序の石碑下部には摩滅により字がみえにくい箇所がある。この部分は特に他の場所から移行した例が多く見られる。同州聖教序の作成において、雁塔聖教序を基盤にして作成するという条件の中ではこの方法しかなかったのかもしれない。

これらの文字は違う箇所の文字から使用している。その数は51箇所に及び、同州聖教序の作成において、注目すべきところと言える。

(c)　まったく根拠のない文字。

特に雁塔聖教序の「伽」の文字は、同州聖教序では「迦」となり、「遷」などは雁塔聖教序の旁の最後に一画がないのに対して、同州聖教序では付け加えられている。

雁塔聖教序	同州聖教序	説明
序碑561	序561（11行目26）	雁塔聖教序は下部の点を左下にぬき、同州聖教序は上に跳ね上げている。左の点も太さが異なり、異なる印象を与えている。
序碑702	序702（13行目51）	偏の造形が異なる。雁塔聖教序は行書に対して、同州聖教序の起筆は楷意。線は太く、旁も全体的にも楷意を意識している。
序記碑408	序記408（23行目50）	イが辶になっている。明らかに文字そのものが異なる例である。

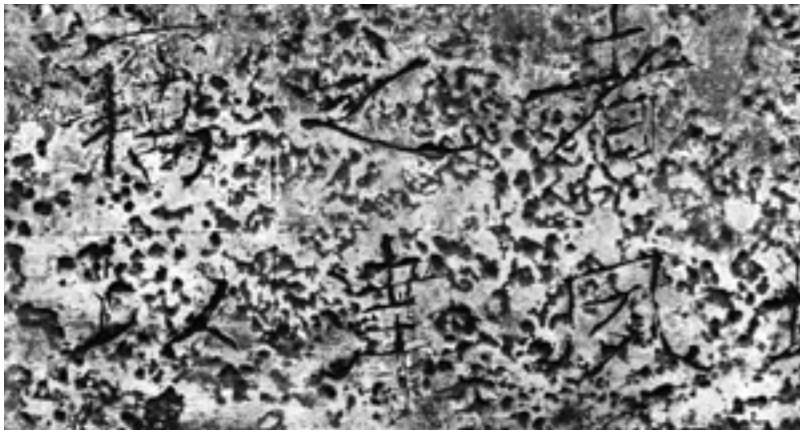
雁塔聖教序	同州聖教序	説明
序記碑439	序記439（24行目23）	摩滅か、石質の悪さか、雁塔聖教序や、他からの出典もなく、異なる文形になっている。同州聖教序の（記439）の偏は李勣碑「歩」と同形。高宗との推定も可となる。
序碑266	序266（６行目21）	雁塔聖教序は巳に横線がない。同州聖教序にはある。唐時代の造形は同州聖教序と同じ。隋以前の文字は「マ」。その変形か、他の理由か、又欠画かは判断できない。

雁塔聖教序、序碑77「処」の上部

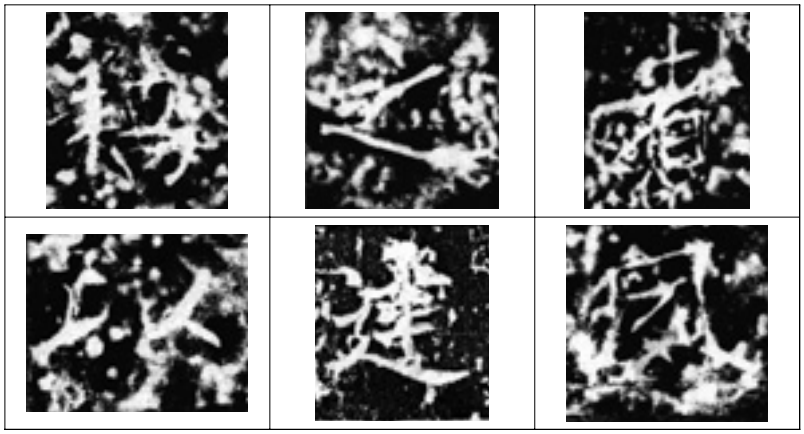
序碑17「興」の左下部

同じ箇所の文字を使用していない原因の一つとして、雁塔聖教序の石碑の下部が摩滅していることにある。両碑を比較すると、下部に異なる文字が多く見られる。なぜなら、石の面が平らではなく、拓をとった時文字がはっきり見えなかったからであろう。雁塔聖教序は石碑が建立して現在まで、約1350年の間、大雁塔の龕の中に保存されていたため、風雨によって摩滅することはほとんどない。そのことが原石を利用してたくさんの修正線を発見できた理由となっている。石碑下部の摩滅には考えさせられてきた。拙稿の「雁塔聖教序の建立の経緯」（『別府大学紀要』34号、平成５年）では雁塔聖教序の石碑建立の経緯を考察したが、はじめは同州聖教序のように、一基の石碑に両文を揮毫する予定だったと推測する。しかし、653年という蘭亭序の揮毫より300年後の記念の年と合致させた建立の予定日を待たずに、太宗は崩御。皇太子李治が皇帝に就任という政治の状況変化が伴い、新皇帝の文章の性質が順番的に先代太宗の序を受けて撰したものの、新皇帝の文章を二番目の位置に刻むことができない。この現状を避けるために、二基にわけ、それぞれ左右対称に配置し、この問題を解決させたのであろう。その時までに、用意されていた石碑は一基。故に、二基の石碑の準備が科せられることになる。そこで「一基を半分に分割し、二基にした」と想像する。それを証明する手立ては現在ないが、雁塔聖教序の石面に存在している複数の斜めの傷の線が、早急に仕上げた感じを今に伝えている。原石の拡大写真を見ていると多くの傷が入っていることに驚かされる。その傷も文字が刻まれる前から存在していたように見える。もし文字を刻んだ後に出来た傷であれば、文字とその線の接点には必ず破片のあとが存在する。序77「処」・序217「興」の写真にはない。傷の上に文字を書いていることがわかる。

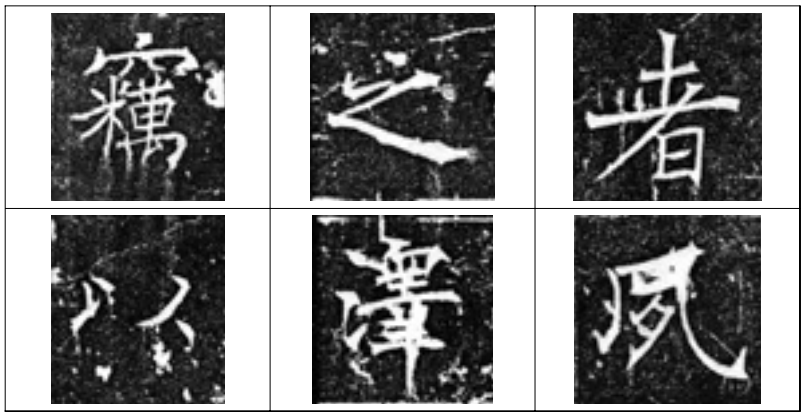
雁塔聖教序の石碑下部の摩滅も文字を刻する前から存在していたように見える。観察できる。〈比較資料１〉写真は雁塔聖教序の序記碑の９～11行目の下部である。拓本でははっきり見えない文字も原石では見える。石質が硬い場所なのか、この一帯には石の目があるのか、石質が乱れている。凸凹な部分が平らにならず、その上から苦労しながら文字を刻んでおり、凹凸と線が重なっているので拓本に映りにくくなってしまった。同州聖教序ではその部分を他の文字から移行するしかなかったのだろう。石碑の面では文字を読み取れるが、背景にある傷のために拓本[17]をとると〈比較資料２〉のようになる。



〈比較資料１〉



〈比較資料２〉



〈比較資料３〉

このように拓本では碑面の凸凹が表れるため、同州聖教序を作成するとき、雁塔聖教序の拓本を使用することはできない、刻者にとっては難題を抱えることになる。

この部分の同州聖教序は〈比較資料３〉のようになっている。

これらの凹凸部分は建立当初から存在していた為、刻者が解決しなければならなかった。その結果だろうか、「津」の文字は「澤」の文字に変わっている。前述のように「澤」の文字は雁塔聖教序記の251字 目「澤」の文字をそのまま用いている。雁塔聖教序の拓本の見えにくい部分が他の場所から移行している例である。「竊」・「夙」の文字はその元の文字を探すことができなかったのだろう。あまり似ているとは言えない「之・者・以」等は他の所から同一文字を移行している。「者」では第四画目の入筆部分において短い線を採用し

[17] 宋拓といわれる日本東京国立博物館蔵の拓本を使用した。伊藤滋氏はこの拓を「明末清初の拓」とし、明拓の調子であり、書学の手本としては最も優れたものの一つと述べている。『墨』157号「これぞ褚遂良の枠」、2002年８月、６頁。

ている。（〈比較資料４〉を参照）これらのことは努めて雁塔聖教序の文字を用いようとする刻者の姿勢が観察できる。

序記碑43	序記碑570	序碑235	序記碑141	序記碑251

〈比較資料４〉

四、同州聖教序の作成者について

同州聖教序の作成者についての文献上の記載がないことは周知のこと。しかし、「褚遂良を取り巻く人の中に該当者がいる」と考えられる。路氏は龍興寺の寺主が寺の名声を高めるために褚遂良が同州に滞在していたことを理由に、建立したとしているが、果たしてそうであろうか。路氏は更に、石碑の最終行の「大唐褚遂良書　在同州倅廳」は、「倅廳」の言葉が宋の時代のものなので宋人の手によるものだとしている。以下五つの角度から同州聖教序の作成者を探索する。

第一、「龍朔三年次癸亥六月癸未朔廿三日乙巳建。大唐褚遂良書在同州倅廳。」の記載は雁塔聖教序にはない。更に、褚遂良が「龍朔」という年号を知るはずもない。故に、後人の手によるものと断定できる。そのうち「大唐褚遂良書在同州倅廳」が宋の時代に付け足されたとすれば、同州聖教序は「龍朔三年次癸亥六月癸未朔廿三日乙巳建」の部分を揮毫した人物によって建立された事になる。

梁啓超はこの部分が全碑の書の風格と一致すると言うが、そうは思わない。「龍朔三年・・・」この部分の書だけが劣るからである。本文と書風を比較すると、雁塔聖教序が直線的であるのに対して、同州聖教序のこの部分は曲線が目立ち、弱々しく、力がこもっていない。そこで、このような特色を探すと、高宗の書風と一致した。高宗の李勣碑などと比較すると、次のようになる。

同州聖教序紀年部分の観察

雁塔聖教序より	同州聖教序本文より	同州聖教序28行目の19字	高宗の書より
●	●	 龍（28行目１）	 龍（李勣碑） 龍（紀功頌）

●はないことの意味

褚遂良の作品の伊闕佛龕碑や孟法師碑などに「龍」はある。旁はこの形ではない。初唐の虞世南の孔子廟堂碑や欧陽詢の皇甫誕碑には同州聖教序と同じ「龍」の形であるが、九成宮醴泉銘は現在の活字体と同形であり、初唐の「龍」の文字は統一されていない。高宗の二碑は行書碑ではあるが、同じ書き方には注目すべきである。

朔（序碑807）

朗（８行目45）

朔（28行目２）

朔（序記碑604）

朗（13行目14）

朔（28行目13）

朔（李勣碑）

月の二画目の反る線は、雁塔聖教序の文字の表現を少し不自然であるが意識している。

三（序碑９）

三（序記碑６）

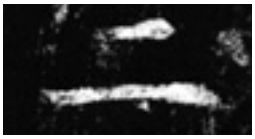
三（６行目55）

三（28行目３）

三（８行目13）

三（28行目15）

三（12行目19）


二（李勣碑）

雁塔聖教序の方が数段引き締まっているが、三画目の入筆は露鋒であり、似ているが、同州聖教序の「三」よりあまい表現になっている。

年（序碑798）

年（序記碑594）

年（11行目２）

年（28行目４）

萃（紀功頌）

年（李勣碑）

 歳（序碑799）	 歳（序記碑595）	 歳（28行目５）	 歳（李勣碑）
「山」の部分は雁塔聖教序の表現に近いが、「小」の部分の真ん中の縦線のはねの性質が李勣碑の「歳」と酷似している。この２文字には斜めの線の位置や点の位置などにも共通点を見出すことができる。			
 次（序碑800） 次（序記碑596）	●	 次（28行目６）	 次（李勣碑）
旁の表現が、序記の文字に似ているが、冫（にすい）はまったく異なっている。			
 癸（序碑801）	●	 癸（28行目７）	●
 癸（序記碑597）	●	 癸（28行目11）	●
雁塔聖教序は蘭亭序の「癸丑」の歳を記念する碑である[18]。雁塔聖教序の二つの「癸」は両碑に刻まれた「癸丑」の「癸」。同州聖教序はちょうどその10年後の「癸亥」の年、その六月の朔が「癸未」であり、二つの「癸」を重ねている。二つの字形は異なり、前者は序に、後者は序記の「癸」に酷似している。これも、同州聖教序を作成する際に雁塔聖教序を基にしていることの立証となる。			
 六（序碑419）	 六（18行目54）	 六（28行目９）	●
雁塔聖教序の三画目の起筆は同州聖教序の書き方に似ている。修正線の表現に誤差はあるが、一筆で書かれた表現になっている。同州聖教序のこの部分を書いた人物（高宗）は修正部分の周知に疑問を持つが、同じく一筆で書いたように表現している。			

<table>
<tr><td colspan="4">雁塔聖教序の三画目の起筆は同州聖教序の書き方に似ている。修正線の表現に誤差はあるが、一筆で書かれた表現になっている。同州聖教序のこの部分を書いた人物（高宗）は修正部分の周知に疑問を持つが、同じく一筆で書いたように表現している。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">
月（序碑804）

月（序記碑601）</td><td rowspan="2">
月（15行目14）</td><td rowspan="2">
月（28行目10）</td><td rowspan="2">
月（李勣碑）</td></tr>
<tr></tr>
<tr><td colspan="4">雁塔聖教序の序の「月」の表現に似ている。</td></tr>
<tr><td>
未（序碑416）</td><td>
未（８行目55）</td><td>
未（28行目12）</td><td>●</td></tr>
<tr><td>
建（序記碑813）

建（序記碑609）</td><td>
運（４行目37）</td><td>
建（28行目19）</td><td>
建（李勣碑）</td></tr>
<tr><td colspan="4">右の二字は露鋒が強いためか、立体感がなく、平面的に感じる。褚遂良が蔵鋒と露鋒を巧みに使い分けているのに比べ、高宗の書は露鋒が強くなっている。</td></tr>
</table>

第二、同州聖教序は雁塔聖教序の文字だけでなく、蘭亭序（唐人の摸写摸本および臨書本）の文字も用いている。蘭亭序の文字を用いることの決断と、その実行が出来る人物と言えば高宗の可性能が強くなる。蘭亭序は太宗の遺言どおり昭陵に埋められたのではなく、高宗が自分で保管していたのではないかと推測している。これが集字聖教序作成への再始動にも繋がり、同州聖教序の中にたった一つ存在する蘭亭序の『茂』の文字の存在とも関連してくる。

[18] 荒金大琳「雁塔聖教序におけるいくつかの問題」、『第六回中国書法史論国際研討会論文集』文物出版社、2007年を参照。

第三、高宗の行動はそれを裏付ける。高宗は政治の実権を次第に則天武后に奪われていく中に同州聖教序建立の時期はある。『旧唐書・高宗紀』には、高宗が同州を含む各地を巡回している事が記されている。同州聖教序の建立直前に、高宗が同州に立ち寄っている。それは同州聖教序建立の一年前のことで、高宗が建立のために現地で活動した証しではないかと考える。

第四、『旧唐書・褚遂良伝』によると、褚遂良は顯慶三年（658）に愛州で他界し、その後、子孫も愛州に左遷されている。弘道元年（683）二月には、高宗の遺詔により本籍を戻され、神龍元年（705）二月には則天の遺制により爵位を元の地位にもどされている。いずれも遺言に値する言葉で褚遂良を許したのである。勿論、褚遂良死後のことであるが、この世での褚遂良の立場に影響するものである。

子孫も愛州に流されたように、関係する人物まで影響が及んでいる。その時、褚遂良の石碑を建立することなど現実的ではない。高宗・則天帝は自分の生きている空間では褚遂良を許さなかった。同州聖教序が建立された時期は高宗・則天武后ともに、表面上褚遂良を認めていないので、当時の大臣以下の家臣が、褚遂良を持ち上げるようなことはできない。まして同州龍興寺の寺主に、権限や度胸があったとも思えない。この石碑の建立という行動を起こせる人物といえば高宗・則天武后のほかに存在しない。則天武后からみれば褚遂良は単なる政敵であったのに対し、高宗にとって褚遂良は皇帝に即位した当時の顧命大臣であり、高宗を皇太子に押し上げた第一人者でもある。しかも、褚遂良の諫言を忠実に聞いていれば、則天武后に政権を奪われることもなかった。表面上は則天武后と意見を一にしても、内心では褚遂良に対しては何らかの良い感情が働いていたに違いない。それが高宗の行動となって表れたのが同州聖教序の建立であったと推理する。

第五、拓本を持っていた人物。唐の時代、例えば蘭亭序の摸本等は作成された後に百官に賜わしている。更に、敦煌より発見された永徽年間の書記の入った温泉銘のように、当時の拓本も現在に伝わっている。雁塔聖教序の拓本がその当時存在したことは決して不思議なことではない。その拓本が何人かの手に渡っていたかもしれない。しかし、当時の拓本やこれらにまつわる話は現在伝わっていない。慈恩寺は高宗自身が亡き母文徳皇后のために建立した寺であったことを考えると、少なくとも高宗は確実に拓本を所有していたに違いない。高宗が雁塔聖教序の拓本を所有することに何の弊害もない。

以上の考察により、高宗が同州聖教序を建立したと推測する。龍朔三年（663）という年代の揮毫に対しても高宗以外に候補者は存在しない。

まとめ

同州聖教序と雁塔聖教序の同一部分を比較して同じ箇所に共通の修正線が見つかったことは、同州聖教序が雁塔聖教序の拓本をもとに作成したことの最も動かぬ証拠となる。しかし、100％の復元ではなく、部分によっては後人の手が加えられている。その手を加えた人物は高宗に他ならない。同州聖教序の建立に際して使用された資料は雁塔聖教序で、雁塔聖教序は褚遂良の書であることから、同州聖教序も褚遂良の書と言える。